

マタイ伝 2 章、ルカ伝 2 章 「負け組への福音」

1A 三つの反応

1B 求めているか

2B 無視しているか

3B 殺しているか

2A 「負け組」にある救い

1B 除者「羊飼い」

2B 御使いの賛美

3B 喜びの礼拝

本文

これからは、大人の方々にお話しをしていきたいと思いますが、実は先ほどから皆さんへも、今のメッセージを伝えたいと思いながらお話ししていました。東方から博士がやってきた話から、私たちに語りかけている三つの事柄があると思います。

1A 三つの反応

私たちの住んでいる世の中は、本当に暗くなっています。社会的にも、経済的にも、政治においても、私たちはそこから希望らしいものを見つけることができません。そして何よりも、自分の周り、さらに自分自身にも闇というものがあります。人間関係もそうでしょう、また自分自身の仕事における業績もそうでしょう、またはご自身の体に病を負っておられるかもしれません。また特に大きな問題が起こっているには見えないけれども、「今のままでいいのだろうか。」という漠然とした不安もあることでしょう。それを、私たちはあまり表に見せないように生きていますが、その見せないようにして生きることにストレスを感じているかもしれません。

しかし明けの明星である、イエス・キリストがおられるというのが、キリスト教会が信じていることです。クリスチャンになって教会に来ている一人一人が、一冊の小説にでもなるのではないかとと思われる、いろいろな所を通して来られた方ばかりです。自分が失敗した、けれども、それでもそのままの自分のところにまでキリストが来てくださった。キリストが、自分の罪、自分の負い目を負ってくださった。自分が天地を造られた神に反抗して生きてきたが、今、思いを改めて、キリストに従っていくと決めた人々であります。聖書には、「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。(ヨハネ 1:5)」とあります。光を信じているので、自分ではどうしようもできなかった闇も、打ち消される力を持っています。どんなに世の中が悪くなるろうとも、希望をもって生きる力が与えられています。

1B 求めているか

私たちは、明けの明星の話聞き、ここに出てくる三役の誰かを自分自身に聞いてみる必要があります。一つは、この東方からの博士、賢者であります。彼らを一言でいうと「求める人」であります。自分たちの研究している分野である星の運行の中で、自分たちを救う方がユダヤ人から来ることを知りました。また、古来から言い伝えられてきた物語の中で、ダニエルの証し、またバラムによる預言があったのかもしれませんが。いずれにしても、わずかな光を彼らは見ました。そのために、彼らは長い旅を決行しました。キリストについて、そのようなわずかな情報があっても、この暗き世に光をもたらす方として追い求めて、事実キリストにお会いすることができたのです。彼らは、幼いイエス様に対してひれ伏しました。これこそが、クリスマスです。クリスマスとは、「キリストを礼拝する」という意味です。この方に自分自身を明け渡すこと、それによって光の中に入ることを意味します。

2B 無視しているか

もう一組の人々は、聖書に通じていた学者たちでした。旧約聖書を詳しく調べていた人です。彼らはヘロデ大王に、キリストがどこから出てくるのかを問われました。それでミカ書を開いて、ベツレヘムからイスラエルの支配者が出てくると答えました。そして、彼らはそこで何ら行動に移していません。東方から来た賢者たちは、エルサレム中を恐れさせた聖書には書いてあります。ならば、彼らは自分で今、答えたことに対して、最も反応して、応答しなければいけない人たちのはずです。ところが、彼らは何らかの行動に出たという記録は、一切ありません！

彼らを一言でいうと、「無関心な人」であります。聖書の知識は豊富にあっても、それで自動的に光に出会っているのではないのです。日本の方々も真面目なので、大抵、「まだ分からないので」と丁寧に断ってこられます。まだ分からない、という言葉は、言い換えると、十分に聖書を勉強して、キリスト教のことを知ったら信じられるようになる、ということでしょうか？いいえ、聖書を勉強しようとも、この宗教指導者らのように救いに至らないことは、しばしば起こります。みなさんは、いかがでしょうか？東方の博士のように、光があることを知って求めておられるでしょうか？それとも、ご自分には関係がないと思っておられるでしょうか。

3B 殺しているか

そして三つ目の種類の人々は、「殺す人」です。ヘロデは、ユダヤ人の王と呼ばれるその幼子を殺そうと思っていました。東方の博士たちは、夢の中でヘロデのところに戻るなという警告を受けたので、そのまま自分の国へ帰って行きました。それを知ったヘロデは怒り狂って、なんと、ベツレヘムに入る二歳以下の男の子をみな殺させました。ベツレヘム幼児虐殺事件が起こったのです。幸い、天の使いがイエスの父ヨセフに、「エジプトに逃げなさい」と告げていたので、イエスの家族は難を逃れましたが。

なぜヘロデが、殺すところまで考えたのでしょうか？それは、自分がユダヤ人の王なのに、他の

ユダヤ人の王と呼ばれる者が出てきたからです。同じところに王が二人いることは許されることではありません。自分の地位を脅かされたので、それでイエスを殺そうとしたのです。

そこで私たちが考えなければいけないのは、「自分の人生は、自分のもの」という考えを、誰も持っているということです。ヘロデのように、自分のことについて自分が治めていると思っています。これまで自分のことについて、自分で努力して築き上げてきました。そこには、自分の城があります。そして自分自身がその城主であります。けれども、クリスマスは、「イエス様が、城主になります。」と宣言していることです。イエス様を自分の人生で光とすることは、イエスが自分の王とすることです。東方の博士が礼拝するように、イエスを自分の主とすれば、神を礼拝するように導かれます。

2A 「負け組」にある救い

1B 除者「羊飼い」

そこで、もう一つのクリスマスを紹介したいと思います。今、私たちが見てきたのは、イエス様が幼子の時、一歳、二歳の時のことですが、生まれたばかりの出来事をルカが福音書で記しています。東方の博士は、その国では政府のシンクタンクのような人、非常に高い地位にいる人たちでしたが、ルカによる福音書で赤ん坊のイエス様のところに来る人は、羊飼いでした。当時、ベツレヘムの野原で羊を飼っていた人たちは、今の時代でいうと、「ゴミ拾いをしている人々」のようなイメージであったと思います。羊飼いは、ユダヤ人社会において神殿税を払っていませんでした。つまり、納税の義務を果たしていないほど、見捨てられている人々でした。ユダヤ人の律法を守るように期待されておらず、いてもいないかのような扱いを受けていました。

2B 御使いの賛美

その彼らのところに、天使がやってきたのです。夜なのに、主の栄光で回りが輝いて、彼らは恐ろしくなりました。「2:10-14 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」」

時は、ローマ帝政の始まりの時でした。アウグストが皇帝であった時です。ローマの歴史について興味があれば、ご存知の名前でしょう。英語で、August という八月を表す言葉はアウグストから付けられた名前です。彼の養父は、ユリウス・カエサル、英語的に言えば、ジュリアス・シーザーです。「ブルータス、お前もか」という友人の裏切りを話したあの有名な言葉を言った人です。戦いに明け暮れるローマの共和政の中でついに、力で持って押さえ、パックス・ロマーナと呼ばれるローマの平和を確立したと言われる人です。日本でいうならば、徳川家康のような存在でしょうか。戦

乱時代を終わらせ、日光東照宮では神として祭られていますね。

ですから、アウグストもローマ市民によって、救い主と称えられました。また神格化もされて、神の子とも呼ばれました。そして彼が平和をもたらしたとして、良き知らせ、福音をもたらしたとも言われていました。その一つ一つに対して、福音書は、「いや、イエスが神の子であり、救い主であり、平和の君であられ、福音なのだ。」と宣言しているのです。先ほどの、ユダヤ人の王ヘロデに対して、ユダヤ人の王が生まれたという宣言があったように、世界の救い主と呼ばれたアウグストに対して、この方こそが救い主であると宣言しています。

しかし、次が大事ですが、力をもって対抗しているわけではありません。むしろ、社会的に疎外されている羊飼いに對してこのことを、神は示されました。そしてイエスの母マリヤもヨセフも、貧しい家庭でした。皇帝アウグストの勅令である住民登録のために、臨月なのに何日もかけてヨセフの出身地のベツレヘムに行かねばならなかったのです。そして行ってみたら、どこも宿屋がいっぱいです。なんと家畜小屋で出産せねばなりませんでした。神の良き知らせ、福音は、弱くされている者たち、悩んでいる者たち、心が空しくされている者たち、心が砕かれている者たちに届くのです。

3B 喜びの礼拝

そして羊飼いたちは、天使に示されたことに従って、喜び勇んでベツレヘムの町の中に入っていく、家畜小屋の飼葉おけで寝ておられるイエス様を捜し当てました。

私は、この羊飼いへの神の啓示を見る時に、すでに古い言葉になりましたが、「負け組」という言葉を思い出しました。経済的、社会的な競争の中で富んでいく者が勝ち組で、そうでない者たちが負け組としばしば言われます。私たちは日々を生きていて、その競争の中で生きていますから、何とかして自分を引き立てなければいけない、自分が評価されて、受け入れられるようになっていなければならない、という気持ちがあります。この競争哲学が、あまりにも浸透していますから、そんなことを意識しなくても、自分を引き上げていくことがあまりにも自然になっています。自分を支えているものが自分の努力や成果であって、けれども、もしかしたらその柱も倒れてしまうかもしれないという不安も抱えながら生きています。

けれども、福音はその反対のことを教えます。世界にいる王たち、皇帝さえも動かす神、その主権者が負け組の人たちのところに来てくださる、ということです。自分が頑張るのをやめるとき、そしてただありのままの自分で神の前に出る時に、神がそのへりくだったところから、恵みをもって働いてくださいます。

ちなみに、この「負け組」そして「勝ち組」という言葉の由来を知ると、もっと興味深い真実が明らかになります。「勝ち組」という言葉は、太平洋戦争において、ブラジルなどにいた日系の人たちが、戦争が終結していたのに、「日本が連合軍に勝った」と信じていた人たちの集団のことを、勝

ち組と呼んでいたそうです。「日本が負けるはずがない。」「日本は絶対に負けてはならない。」と思っていた人たちが、敗戦したという文書が回ってきたのに、それを偽物だと思っていました。それで、正しく負けたのだと認めた人々に対して、その人の商売を邪魔したり、脅迫状を投げ込むなどしたそうです。けれども、彼らこそ敗北者ですね。勝っていると思いつけることこそ、空しく、哀れであります。

私たちは戦後七十年が経とうとしていますが、戦争はもちろんしていませんが、人生の中で気持的には、「勝っていなければいけない。」と思っていないでしょうか？けれども実際は、それは現実的ではないのです。それを聖書では、神がそのように仰っておられます。神は、私たち人間が倒産してしまっただようになっていると教えられています。初めの人間アダムが罪を犯しました。それゆえ、神の基準から離れてしまっている、的を外したような生活をしていると教えています。それでも神を認めず、自分で生きようとしていくのを、神は「高ぶっている」「反抗している」と教えておられます。最後に、人は死んだ後に裁判にかけられ、刑罰を受けなければいけません。しかし神は、そうした負け組のところに来てくださいました。人としてキリストが生まれ、そして肉体をもって十字架の上で死んでくださいました。そして、三日目によみがえってくださったのです。

重荷を下ろすことができます。人生の重荷や疲れを、イエスのところに行けばそこに降ろすことができます。そして、人生で本当の意味で負けを認める時に、神にある勝利を手に入れることができます。そこからのスタートです。